第四章　人々の信仰

第一節　屋敷神

市内の古くからの家の屋敷地内には、多く屋敷神が祀られている。なかでも目立つのは、稲荷であるが、このほかにも猿田彦大明神・蚕影・御岳・山神・弁天・水神・八幡・金山・諏訪・春日・金神・藍神・御魂霊神・不動・荒神・竜神・地神・オシャモジサマなどが祀られている。実にさまざまな神が屋敷神として祀られているが、市内全域において群を抜いているのは稲荷である。

稲荷といっても、祭神名はさまざまで、正一位稲荷をはじめとして豊川稲荷・伏見稲荷・東伏見稲荷・穴守稲荷・笠間稲荷・茶木稲荷、それに豊繁稲荷・福徳稲荷・福富稲荷がある。祭神の名称からすると、各地の著名な稲荷社からの勧請をうかがわせるものと、「豊繁・福富・福徳」のように、勧請にあたって何を願ってのことかをうかがわせてくれるものがある。こうした屋敷神としての稲荷は、いったいいつの時代に多く勧請されたのであろうか。稲荷の祠堂に伝えられる勧請書を手懸りにしてみると、文化一三年（一八一六）のものがもっとも古く、多くは幕末のものが多い。江戸において稲荷信仰が広がったのは、徳川家康入部以降のことで、一八世紀後半にはいると流行神として大いに各地に展開したといわれる。市内での稲荷社の勧請先が、江戸の市ケ谷の茶木稲荷や、羽田の穴守稲荷とする例からみ

ると、江戸で流行した稲荷信仰が、福生にもおよんだことが判明するとともに、伏見・豊川のように幕末に流行した伊勢参りの産物とも考えられ、稲荷社と神明社とが相殿とされているのもその証左であろう。

稲荷は、屋敷神として多く勧請されてきたが、もう一方においてニワバの神として近世末に祀られてきた歴史がある。幕末の大きな社会変動のなかにおいて、地域の人々が稲荷の祭りを中心にして、互助組織を結成してきたのである。各家の繁栄を願っての屋敷神としての稲荷と、地域の招福を願っての稲荷とが、近世末に市内において成立していったとみなされる。

このほか、屋敷神として注目されるのは、霊神ないしミタマサマと称される神で、伝承によれば稲荷より古いといわれ、家を守る神であってなかには古い位牌を神体としているものもある。また、丸い自然石を神体とするものも多く、他地域の事例からして、丸い自然石を祖霊の寄りつくものとして、考えてきたのではないかとみなされる。そして、稲荷と称していても丸い石を神体とするものも多く、この点からすると、祖霊を屋敷内に神として祀るのが基本であったが、稲荷信仰の流行のなかで霊神・ミタマサマが、稲荷におきかえられていったのではないかと考えられ、その要因は近世末の大きな社会変動が、その背景としてあるのではなかろうか。

第二節　講の集まり

福生全域で現在おこなわれている講には、天神講・太子講・金毘羅講・弁天講・子の権現講・参宝講・福生不動講・御嶽講・塩釜講・御詠歌の講・地蔵講・妙見講・蚕影講・寒川講・薬師様の祭り・稲荷講がある。また現在はお

こなわれていないが、かつては存在した講として、不動講・大山講・榛名講・お熊様の講・念仏講・お獅子様の講・浜川様の講・三峯講・豊川稲荷講・心経講がある。また大師講は一度止めてしまったが今また復活の動きがある。

天神講　福生地区の加美にあり、天神様は天の宮の天神児童遊園の中に祀られ、学業成就の神様と信仰されている。御神体は小さいが、木彫彩色坐像の菅原道真公で、講中の協力で明治の神よせに会われなかった。講は明治一〇年（一八七七）には一七軒であったという記録があり、現在三八軒参加し男性中心の講で、世話人四名、当番は六名年番制である。祭日は以前二月二一日で、現在はその日に近い日曜となっている。祭りの朝全員で境内ほかを掃除し、幟、高張提灯を一対ずつ立てる。天神様に、鯛、野菜、海山のもの、果物と、灯明、香、酒も供え総会をする。終わって世話人一名当番二名で、永昌院へ「法印迎え」にいく。この三名がお札箱・お経箱・幣束を持って並び、法印二人が天神の宮までお練りをする。天神様に祈願をし、講員にお札をくばり、境内でお酒を汲み、お日待をし、昼前祭りは終る。昭和六四年（一九八九）からは集まってきた子供たちに、学業成就の菓子袋を渡している。講の維持費は講の会費と、天神様の用地の梅の実と、竹材の売上げなどで賄っている。

昭和三二年（一九五七）の祭りまでは、神明社神官が祝詞をあげた。一升餅のお供えを上げ、紅白の小さいお供えもたくさん作り上げた。その餅は智恵を持つといわれ、講中の家々にくばられ、境内で子供に袋菓子をくばった。お日待は講中の家を宿にし、順番におこなった。男衆がうどんを作り、女衆が豆腐、人参、油揚入の煮シメを作り、振舞った。昭和三三年から昭和五八年までは加美のクラブで、その後は天神様の境内でお日待をおこなうようになった。

熊川地区では南にあった。真福寺の脇の天神様の講で、尋常小学校一年から高等科二年までの男の子の講で、講の日は一月二五日、後一月二〇日に近い日曜となった。六年生の子供が大将で、皆を連れて天神様へ行く。一列に並び

一礼して宿に向う。講仲間の年長の子供の家を宿にお願いした。天神様の掛軸を飾り、皆で持ち寄りの米、野菜でお日待のご馳走、五目飯を宿のお母さんに作ってもらい、食べて楽しく過ごしたが、戦争を境に講は絶えてしまった。

内出にも同じ真福寺の脇の天神様の講があり、尋常小学校一年から高等科二年までの男の子の講で、講の日は一月中頃だった。高等科二年の子供の指図で天神様へいき、お酒を供え一人ずつ洗米を供えた。内出は子供が少なく大きな集まりではなかった。宿をしてくれる家に集まり五目飯を食べた。持ち寄りではなく、少しずつお金を集めて宿に出した。宿では掛軸は飾らなかった。やはり戦争前に講は絶えてしまった。

太子講　明治のはじめからつづいている講で、福生全域の職人たちで、講員は五〇歳代から八三歳の男性だけで、一六名と決まっている。本町第一小学校裏門前に太子堂があり、堂には約三〇センチメートル木彫彩色の聖徳太子立像が安置されている。その太子様をお祀りする講で、一月と九月の二二日が講の日で朝全員で掃除、軒に横幕を張り、お供え、花と榊（さかき）、灯明、香を供え、永昌院の法印が経を上げ幣束も供える。仕事の繁栄・身体健全・交通安全を皆で願う。午後は講元が宿になりお日待をする。宿に聖徳太子立像の掛軸（明治三年・〈一八七〇〉作）を掛け、酒、蕎麦ほかを振舞う。会費制だが積立てはしない。太子堂の鍵は講員が当番で預かっている。

金毘羅講　雨を降らせる、航海と交通の安全、家内安全をお願いする金毘羅様の信仰は昔からあった。玉川上水の新堀橋近く小高い山の上にお宮があり、御神体は「金毘羅（こんびら）大権現」と刻まれた石塔で、享和三年（一八〇三）の銘がある。昭和三六年講が発足した。上屋敷地区周辺の男性中心に三六名の講で、翌年お宮の後の小屋が寄付され金毘羅講の集会所になった。祭りは四月と一〇月の一〇日、年二回おこなう。お宮に榊、灯明、尾頭付き、野菜など海山のもの、果物を供える。当日は夕方から祭りが始まり神明社神官の祝詞があり、四国の金毘羅様のお札くばりがある。四月の

図Ⅳ-43　金毘羅御神体

祭りにくばられ、代参が行かない年は一〇日に間に合うように、四国金毘羅様よりお札を送ってもらっている。その後集会所で講員持ち寄りの酒を汲み、オコモリをする。

弁天様の講　四月八日の花祭りは、清岩院の弁天様の御開帳と講の日である。清岩院檀家有志の人々の講で、門前の檀家が中心になり男性だけで、明治末年から現在までつづく講で、当日寺の弁天池を渡ったところにある建物に弁財天を安置する。木彫彩色で宝剣を持つ座像で、徳川家より拝領した仏師源慶作の、小さいが美しいお姿である。白木の膳に、生の昆布巻、生の人参を斜切りにし、立てて盛った皿、豇豆入り饌米の皿、塩を盛った皿を並べ弁財天に供える。山門脇に幟を立て、池の畔にボンボリも何対か立てる。午前一〇時頃檀家総代と有志が集まり、清岩院住職が大般若経六〇〇巻の内、その年の干支五〇巻の経巻を転読する。お振舞いがあり、三〇名くらい交代で、弁天様の灯明と線香の火を絶やさないようにする。参拝者に弁天様のお守りを授け、夜は全員でオコモリをする。池の畔のボンボリの火が絶えると講は終わる。大体九時頃で現在役員は二〇名である。

子の権現福生講　吾野（埼玉県飯能市）にある大鱗山天竜寺、通称「子の権現」を信仰する講である。子の権現は、火伏せ、足腰の守り、子供の寝小便、脱腸などに霊験あらたかである。講が始まって六〇年くらいたち、昭和六一年

には永田、長沢、本町、熊川各地区の全域で二七〇名の男女の参加者があり、子の権現講の中でも大きい講である。講元は永田のH氏、世話人は、各地区よりでて計一〇名である。昭和四七年より麓からバスでいかれるようになり、四月第四日曜を講の参詣の日と決めた。当日護摩(ごまた)焚きをし、経を唱え、護摩札を受け、お寺で坊入(ぼういり)（お高盛り飯ほか）をいただく。参詣と講の費用は積立てをしている。戦前は役員が前日から山へオコモリをし、お札などの支度もした。戦後物のないとき、坊入の米を集め山へ運び上げたり、大変な思いがあった。

参宝講（観音講）　玉川上水宮本橋の畔にある観音堂の観音様を信仰する講である。二〇センチメートルくらいの聖観世音菩薩だが、上内出観音と呼ばれ信仰されている。宝蔵院（廃寺）の檀家と観音堂の近くに住む女性中心の講で、観音講と呼ばれた頃は、年二回の祭りで、人寄せに鐘を打ち、縁日の店も並びお囃子の奉納もあった。ローソクを点(とぼ)し、経を唱え当番でオコモリもした。昭和五二年九月堂をなおし、電灯・畳も入り、講の名も「参宝講」と改めた。以来毎月一七日、堂に二〇名くらいが集まり、花、線香、菓子を供え、永昌院の法印と観音経、般若心経などを唱和し茶を飲み歓談する。積立てもおこなっている。毎年一〇月一七日には観音様に尾頭つき、海山のもの、赤飯をお供えしている。

福生不動尊の講　大正一一年（一九二二）一二月に、本町の守り本尊として福生不動尊が建立され、同時に境内に笠間稲荷も祀られた。区画整理で遷座されたが本町全体が参加する講である。

御嶽講　青梅市御嶽山に鎮座する御嶽神社は、多摩地方では農耕の神と信仰され、正月太占(ふとまに)のお札、盗難除けのお札（お犬さま）、雨乞いの水が有名である。

中福生地区の御嶽講は、男女参加で三九名、講元一名、世話人は年番制で四名順ぐりに当る。講元M家に昔から御

嶽様をお預けしてある。ワケミタマという。毎年一二月八日近く、神社から御師がM家に来訪し、神棚のワケミタマに祈禱する。このとき、大口真神御符（盗難除けお犬さまの御符）と火難除神璽のお札各三九枚も祈禱され、講中にくばられる。お犬さまのお札は作物守りで、竹に挟んで畑に立てたり、家や蔵の入口に貼る。五月五日は講元世話人の五名で神社へ代参に行く。神前に米一升を供え、祝詞をあげ、代参祈禱神璽のお札三九枚を受け、のち御師の家でお日待をする。

牛浜地区には御嶽神社がある。現在は牛浜橋を渡った玉川上水の縁にあるが、昔は市民会館脇の地蔵坂にあった。社は石祠である。男女参加の熊牛と福牛の二町会の人たち四三名の講で、役員は二町会より各三名の六名で講元はいないが、神社の隣に昔から住むA氏が代表になってくれて、宿もお願いしている。毎年一二月八日近く、御嶽神社から御師が来訪し、社前に御酒、御供米、榊を供え、社に祀る神符に祝詞をあげる。参加者は代表者と役員ほかで、のち宿で直会をする。四月八日近くの日曜に代表者と役員で神社へ代参に行く。このとき社の神符をお返しし、新しい神符をいただいてくる。神前に酒二升を供え、祝詞をあげ、大口真神御符と代参祈禱神璽の四三枚を受け、のち御師の家でお日待をする。戻って社に神符を納めてお札をくばりお札代をいただく。代参の費用は自費である。役員はヤクインクジを引いて決め年番制である。お犬さまは家や蔵の入口に貼る。昔御嶽へ雨乞いに皆で行ったりしたこともある。又おじいさんの代からの参加者も多い講である。

南・内出の両地区とも、講は現在なくなっているが昔は盛んで、「内出英雄家文書」の中に南・内出・鍋ケ谷戸・牛浜のほとんどの家に御嶽山のお札をくばったと記録がある。

塩釜講　東大和市の高木神社境内に鎮座する塩釜神社は、安産と火伏せの神様なので、女性から信仰され、福生は

昔から講がつづいている。女性中心で、長沢・永田・加美（一軒）の三地区で一一二軒が講に加入している。例年四月一五日塩釜様の祭りには、長沢の講元S氏（男性）と長沢四名、永田二名の女性六名が、車でかならず代参に行く。講金を預り、代参を済ませ、お札と塩と洗米お供物もいただく。お願いすれば安産のローソクも受けられる。代参者全員は、あと高木の人々の接待を受け、一合酒、赤飯、煮シメをご馳走になる。これは昔からつづく心暖まる行事である。代参が戻ると各地区はお日待をする。神社から御神酒一升くださるので、長沢・永田で五合ずついただく。

長沢地区は長沢クラブで女性中心に集まり、塩釜様の掛軸を掛け、五目飯、キンピラ、煮シメの三品を供え、灯明を点し皆で一礼御神酒を飲む。お札などをくばり、安産の洗米は希望すれば妊婦に渡される。午後七時頃から始まり、茶菓で過ごし、踊り、カラオケを歌い、楽しむお日待である。全員に賞品がいき届くようにし、陰で講元講中の男性が働く。昔は昼間の農作業と家の仕事で、息つく暇もない忙しさの女衆には、塩釜様のお日待は息抜きができると楽しみになっていた。その頃はクジで役員を決め代参と講金集めをした。現在班に分けて交代制で講の運営を女性がおこなっている。昔代参は男衆二名歩きで、次に自転車、電車で行き、三〇年前から車で女衆が代参で行かれるようになった。昔からの講元S氏宅には、明治三年（一八七〇）の講中名簿、掛軸が保管されている。

図Ⅳ-44　塩釜講（左永田・右長沢）

永田地区は永田クラブで女性中心に集まり、塩釜様の掛軸を

掛け、法蓮草の白あえ、五目飯、煮シメの三品を供え、灯明を点し御神酒を飲む。三品と寿司ほか茶菓子で、お喋りをしゆっくり過ごす。頃合を見てお札などをくばる。洗米は希望があれば妊婦に渡される。お日待の費用は掛り勘定である。代参、講金集め、日待の支度などの当番は隣近所をグループにして、一年交代である。ゆっくりくつろげる塩釜様のお日待は、講中では今も楽しみにつづけている。クラブを使う以前のお日待は、講中の家が持回りで宿になった。宿に決まると畑に多めに野菜を作り、都合が悪いときは次にお願いし、不幸のときは講を休んだ。代参が戻るとお振舞いをし、宿に掛軸を掛け、三品と天ぷらほかを作り、講仲間の女衆が集まるのを待ち、御神酒を飲み食べてお喋りお日待をした。「出す品数は多く出費は少なく」が宿をする女衆の腕自慢だった。戦争で休み、戦後お日待を復活したが、材料集めが大変な宿でのお日待であった。やはり男衆二名に代参をお願いし、のち車で一緒に女衆も代参に行かれるようになった。講元はいないが、講中名簿ほか保管は講中の女性でされている。

御詠歌の講　南地区の千手院御詠歌の講は、千手院檀家の女性で五〇歳から八〇歳くらい、四〇名くらいの講で、千手院の大黒さんを中心に週一回練習をおこなっている。先代住職のときに鎌倉建長寺で教わった御詠歌は、釈迦を称えて奉詠する。一年を通してかならず詠ずるのは、二月一五日－釈迦牟尼如来涅槃会　四月五日－達磨忌　四月八日－釈迦牟尼如来降誕和讃　盆の一六日－大施餓鬼　八月二三日－建長寺開山忌　一二月八日－釈迦牟尼如来成道和讃である。改まっておこなうときは全員輪袈裟をつける。左手に鈴、右手に撞木を持ち、立つ、すわるの二つの奉詠がある。建長寺福生支部千手院御詠歌講として多摩仏教会の御詠歌の集まりに参加し、西多摩では一番古い講である。

鍋ケ谷戸の福生院にも御詠歌の講がある。福生院檀家の女性で五五歳から八五歳ぐらいの五〇名ほどの人々で、福生院住職の母堂を中心に、週一回練習をおこなっている。二〇年ぐらい前から御詠歌の講が始まっている。

地蔵講　牛浜地蔵尊　子育てと安産の御利益があると信仰され、現在は千手院牛浜共同墓地に安置されている。七〇名ぐらいの講で、役員は千手院檀家の役員でもある。地蔵尊の祭りは四の日だが、墓参りにお参りできるように、九月二三日となっている。この日役員有志で地蔵尊三体に赤い頭巾とよだれ掛けをつける。堂に赤い横幕を張る。午前中千手院住職の地蔵経がある。お供えした冷酒をいただき、堂の前で一日オコモリをする。お参りの人には「木板刷りのお姿」や菓子を供物として渡す。昔牛浜に疫病が流行した。子供たちを病から守り、無事育つようにと祈願したのがこの地蔵尊で、清岩院に願ってお借りしてきた。はじめ安置された場所は市民会館坂上で、坂を下って数回の移動があった。戦前地蔵尊の祭りは九月二四日で、青年会と熊牛、福牛の有志とで、芝居を掛け露店も並び、人集めの浄財で地蔵尊を維持した。それより以前の祭りは夜火を焚き、子供が集まり地蔵様のオコモリをしたという。一〇年ぐらい前千手院にお願いして現在地に移された。祈願の香華が絶えない地蔵尊である。

桜株の地蔵様　現在加美平西公園に安置されている。この地蔵様は天保六年（一八三五）建立と伝えられ、飢饉と噴火の年であった。初め青梅線立体交差点のところに祀られ、桜並木だったので桜株の地蔵様と呼ばれ何回も移動があった。加美周辺と加美第二町会が中心となってお守りし、四月一五日前後の日曜が祭りで、朝皆で掃除をし地蔵様に赤い頭巾とよだれ掛けをつけ、海山の供えものをする。幣束を上げ永昌院の法印と地蔵経を唱える。お清めの酒を皆でいただき、桜の下でお日待をする。

福徳延命地蔵尊　通称はおその地蔵と呼ばれ、長沢長徳寺墓地入口に安置されている。明治時代実在の女性で長沢生れ、嫁にいったが実家へ戻り病死した。人助けの地蔵を建てることを遺言したので、おその地蔵を建立した。子供の病気を治して下さると信仰されている。祭りは四月と一〇月の一四日で、おそのさんの実家と地蔵世話人会の参加

でおこなわれ、地蔵さんに赤い着物をつけ頭巾もかぶせる。長徳寺住職のお経と塔婆も上げる。お参りの人にキャラメル、餅など供物を渡す。お日待はおそのさんの実家でおこなう。

妙見講　秋川市折立の山に妙見様の堂があり、原ケ谷戸地区に講の参加がある。妙見様は星守りの神で、暮は星祭りと家族の星占いをおこなっている。昔は年一回宿を決めて、フレツギで夜女衆が集まり、お題目を唱える妙見講のオコモリがあった。

蚕影講　お蚕日待ともいわれ女衆の講で、年二、三回皆で持寄りの飲食をした。養蚕が盛んな頃で、現在では例年四月一七日蚕影山の祭りに、以前養蚕をおこなっていた家々が永昌院に集まり、蚕影様の本尊と掛軸に祈願の護摩焚きをし、講はつづいている。

寒川神社福生講　寒川神社（神奈川県寒川町）を信仰する講で、八方除御神札（方位除けと悪事災難除け）で知られている。昭和三三年（一九五八）講が始まる。福生と多摩の広い地域の人の参加で、大体一二〇名ぐらい年一回車で全員参拝に行き、お札をいただいてくる。

ジャンガモンガの薬師様　長沢通りの薬師堂に安置されている長沢の薬師様は、お姿は小さいが立像で左手に薬つぼを持ち、病気の中でも眼病を治すと信仰されている。昔から九月一九日（ナカノクンチ）がお祭りで、長徳寺檀家と長沢第一、第二町会で薬師様をお守りしている。当日檀家総代と各町会の町会長と二町会の年番一二名で、薬師様に花、海山のものを供え、長徳寺住職のお経があり、午前中お堂でお日待をする。参拝者にお札くばりはおこなわない。昔から〝ジャンガモンガ〟の薬師様と呼ばれ、経をあげ、鉦を叩くカネハリ念仏から、この名がついたという（戦争中、鉦が供出で失われ中断した－H氏談）。昔は堂前を湧水が流れ、堂川と呼ばれこの水で眼を洗うと眼病が

治るといわれた。ナカノクンチは芝居がかかり、露店も並ぶ賑やかなお祭りだった。

その他　現在おこなわれていないが、以前あった講をあげてみる。

大山講　神奈川県伊勢原市の大山に鎮座する阿夫利神社を信仰する講で、雨降りの神といわれ永田・内出・鍋ケ谷戸の各地区に講があり、代参とお札くばりもあったが戦前に講はなくなった。

榛名講　榛名神社（群馬県榛名町）を信仰する講で、霰除けの神は養蚕と農耕に欠かせなかった。鍋一地区春四月一〇日前に伊香保一泊で代参が行った。蚕が主だから一〇〇軒分のお札を受けた。鍋二地区　春四月一〇日前に一泊で代参が行った。お札は杉っ葉につけ畑にさした。戦後一〇年くらいたって、講はなくなった。

内出・南・永田・長沢各地区にもかつては講があった。

お熊様の講　長沢のM家に祀られている、熊野三所大権現は延享二年（一七四五）と記した木札の御神体で、講は九月一五日に女衆二〇人ぐらいが集まって、飲食し賑やかなお日待をした。ここ十数年講は休んでいる。

念仏講（百万遍）　原ケ谷戸地区　原ケ谷戸共有稲荷の庭で、夜火を焚いて女衆が百万遍をおこなった。子供も参加し持ち寄りで飲食した。晩秋一一月頃だったがここ四、五年講を休んでいる。

南地区　千手院では昔から、月二回ぐらい女衆で百万遍をおこなったが、戦後は御詠歌の講になった。百万遍の数珠、伏鉦は千手院に保管されている。

お獅子様の講　平方八枝神社（埼玉県上尾市）の悪魔払い、畑守りの獅子で、関東一円を回り、福生市域では熊川を回った。

内出地区　春に平方八枝神社に代参が行き、お札を四〇名分ぐらい受けた。秋にはお獅子様の巡回があり、回り順も決っていた。担いで回ったが、戦前に講はなくなった。

鍋一地区　鍋二地区　秋頃巡回があった。戦争で手不足となり、巡回は中止、のち講はなくなった。

南地区　講の参加者は少なかった。

心経講　内出の真福寺を中心に、明治二〇年（一八八七）頃から、昭和五〇年（一九七五）頃まで講があった。年四回持ち回りの宿に集まり、掛軸を掛け、音頭取りに合せ、木魚を叩き、般若心経を唱えたのち飲食した。